

司馬遷と班固

岡崎文夫

前漢の武帝が、思想統一の政策として儒學を表章し、之に獨尊の地位を與へたことは、支那文明史の上に於て最注意すべき事件であつたこと、云ふ迄もない。これ以來支那の學者は殆んどあらゆる學問を儒學と相關係せしめて説明せんとするに傾く。史學を論ずる場合に於ても、其標準を取る所、或は尙書に或は春秋に或は春秋左氏傳に之を求むるを常とする。然るにも關らず事實標準の史、卽正史と稱する者は悉く紀傳體の歴史を指し、其意味に於て編年體の歴史は閏位にありと定むべし。而して紀傳體の歴史は司馬遷の史記に徧り、班固の漢書之を繼紹して體例を詳備ならしめた。故に史、漢の兩書は實に後史の標準であること疑ひなく、若し其草創の名譽を與ふべくは、司馬遷こそ當然それに値すること勿論であらう。たゞ班固は其父彪の言に據りて史記の缺點あるを指摘し、これより以後史、漢の優劣を云爲するもの多い。余固より敢て兩者の優劣を定めんとする心はないが、凡そ是非の論、多くは各當る所あり、之を其實に卽して觀察を試むるも亦興味あることであらうと思ふ。

後漢書范滂傳には、彼が司馬遷に下した批評の言葉がのつて居り、班固は司馬遷傳を作つた折に、

その一部を以て論贊にあてゝ居るから、班氏父子が司馬遷の著作に對する考へ方は同一であること明白であるから、今班固の名の下に彪の意見をも含ましむる。其大意は次の四條に分類し得。

(一) 史記の體例上に缺點がある。

(二) 司馬遷の學問は正統でない。

(三) 史記が材料を整理する點に於て甚だ疏略であり、互に抵觸する點がある。

(四) 史記の事實に對して下した議論は淺薄である。

以上は、余の記述を便にする爲めに大要を勝手に竝列した者ではあるが、内容には大した誤がないと信ずる。右の中(一)は、之を例せば項羽を本記に陳涉を世家に分類し乍ら、漢の淮南、衡山諸王を列傳にくり入れた等のことであつて、此點に關しては、余別に説あるも、今は論せず、専ら(二)及(三)と(四)とを相關連せしめて一應の批判を試みやうと思ふ。

史記の自序には、司馬遷は其父司馬談の六家の要旨を述べた言葉を掲げて居る。それは大體道家の學説を最優れた者と見、儒家の學説を之と比すれば一段劣つて居ると云ふのであり、餘り有名な言葉となつて居るから、今更原文を引用する必要もないと思ふ。王鳴盛の商榷によると、此司馬談の説が直ちに其子司馬遷の説であるとは、一般に後漢の儒者によつて信せられた所である、併しそれは後漢儒者の誤解であつて、むしろ司馬氏父子は其好尚を殊にし、司馬遷は儒學を以て最高の學説と認めたと論じて居る。余は王氏の此説に大體同意を表するのであるが、更に一應の討檢を試みることによつ

て其意を明かにしたいと思ふ。

史記の自序の一節に、

大史公曰。先人有言。自周公卒。五百歲而有孔子。孔子卒後。至於五百歲。有能紹明世。正易傳。

繼春秋。本詩書禮樂之際。意在斯乎。意在斯乎。小子何敢讓焉。

右の文の冒頭「先人」の解釋に二様ある。集解は之を先代の賢となし、正義は之を司馬遷の父談となして居る。余は集解説を是なりと信ずる。而して此一文は、其意猶後につゞいて「昔西伯拘羑里云々」の一節と互に照應して居る者と思ふ。卽「紹明世、正易傳、繼春秋」は「昔西伯拘羑里、演周易、孔子厄陳蔡、作春秋」と其事相關し、「本詩書禮樂之際」は「夫詩書隱約者、欲遂其志之思也」と其意を通ずる者であると思ふ。若し然らば司馬遷の抱負自ら明了である。試に之を孔子世家と對比するに、孔子傳全篇中、其叙事の最精彩あり、文氣昂揚して人に逼る所、實に孔子が春秋を作らんと志を述べた點に存する。自ら深く比する所なくば、遂にかの如きの文章を作り得ないであらう。尤も前に引用した文章と相似た表現法は孟子にも存する。併し孟子は道統の己に傳はるを叙し、司馬遷は著作の希望を言ひ現はせると其意同一でなく、之をしも單なる先人句法の模倣とのみ見做すべきではあるまい。

司馬遷の精神を鼓靈したものは儒家である。故にその著作の中に儒家的色彩の盛られて居ることも亦自然である。史記の五帝本紀は黃帝から筆を起し、其序に於て儒者黃帝を傳へざるものあるも、正

しき史料と古老の傳ふる所、黃帝の實在は疑ないと云つて居る。事實を傳ふべき歴史家の良心よりして黃帝を抹殺するに忍びなかつたとしても、而も五帝本紀の記述の中心は實に堯舜にあつたこと、其記述の内容から推して疑ひ得ないと思ふ。而して世家の始には吳の太伯を列し、列傳の始には伯夷、叔齊を序して居る。太伯は自ら剪髮文身して位を其弟に譲つた人、伯夷、叔齊亦互に國を讓る。堯舜が其位を讓ると同一意圖に出で、儒家の最重んずる所であるに相違なく、又八書の次第は禮を首とし樂を其次となして居る。凡そこれらの諸點は總て儒家の精神を基として其體例を樹立せんと試みた明證にあつるに足るであらう。且彼が材料を撰擇する標準として儒者の所傳を根本としたこと疑ふ餘地がない。五帝本紀序によれば、百家の傳ふる黃帝は、其文雅馴ならざるによりて之を排斥し、孔子の所傳と稱せらるゝ五帝德、帝繫姓を採用したのである。又伯夷列傳序によれば、必ず信を六藝に考ふと明言して居る。故に以上を綜考すれば、司馬遷の精神を鼓舞し、史記の體統を樹立せしむるに預つて力ありし者は、實に儒家の學問であつたこと明白である。

然るに班彪父子が司馬遷の學を正統ならずとし、且其材料を整理するに當り、疏略にして抵觸ある缺點を指摘するの意や如何。後漢書彪傳に云ふ。

至於採經撫傳、分散百家之事、甚多疏略、不如其本、務欲以多聞廣載爲功。

と。司馬遷の自序には、「協六經異傳、整齊百家雜語」とありて、勉めて事實の真相を知らんと努力せ

し者が、班彪の目から見れば、全く整理されざる疏略な叙述となりて徒らに廣聞を誇らんとするやに思はれたのである。其如何なる點が疏略にして前後抵觸して居ると班彪が考へたかは明白でないが、試みに班意を推闡して作られたりと思はるゝ王應麟困學紀聞史記正誤から一二例を指摘すれば、たとへば儒家の必ず傳ふる伏羲を何故に五帝の中に加へなかつた乎、王季と太伯とを別母の所生とするが如きは、太伯、虞仲の季歴を避けて荊蠻に適く理由をなさず等々であつて、又史記の記述が往々尙書の序文と異なる點をも指摘して居る。これ等は支那の學者からは殆んど史記の缺點として認定せられて居る所である。果して史記の説が正しきか乃至は後漢以後の學者の説が正しいかは、事實の眞の認識如何に關する問題であつて、今こゝに之を論議することは不可能である。たゞそんな箇々の問題から離れて全般的に考へるならば、班彪が司馬遷を非難した根本として兩者の間に學派の相違なきや否やと云ふことである。蓋し班氏の意を推して考ふるに、史記の材料とした左氏、國語、世本、國策、楚漢春秋等の記載にはそれ〴〵纏つた説があり、これを無理に綜合すべきものではない。綜合の標準は確乎たる經傳にあるべきであつて、之なくしての綜合は、徒らに異聞を採録することに終るべく、却つて之を分散收載した史記を見るよりも、直ちに其原文を見るに如かぬと考ふるやうである。故に班彪の頭腦裡には既に出來上つた經學なるものが嚴として存在して居たと考へねばならぬと思ふ。

今王國維氏の説に據るならば、漢の武帝が思想統一政策を實行した以前に於て、支那の文明史上注

意すべきは秦の文字統一政策である。秦は一方焚書坑儒の暴政を行ふと共に他方文字を篆、隸二體に統一し、博士の官を存じ、之をして其據る所の六經を篆、隸に寫定せしめる。こゝに既に漢の思想統一の萌芽があるのである。漢の武帝に至り、儒學が獨尊の位置を占むるや、當時學官に立つものは斯を以て利祿を得るの捷徑となし、茲に顯門の學風を樹立することになつた。所謂今文派なるものは斯の如くにして生じ、亦かくして儒學の正統説が成立するのである。然るに司馬遷は其父談より充分に黃老説の要諦を聞いて居る。且十歳の時既に今文に寫定せられざる古文を讀んで居、又太史令となつて後祕府の古文を自由に抽讀して居る。要するに天下の書は、猶一派の學派によりて概念化せられざる生な材料として彼の眼前に横はつて居たのである。従つて彼は絶えざる研究の後に、儒家の傳ふる材料に價値を認めたとしても、それは將に成立せんとする今文派の概念に拘束せられたのではなくして、彼自身の中に生きた儒學である。これ後漢の儒者の既に正統なる學説に支配せられたると自ら異らざるを得ないのである。

以上によつて司馬遷と班氏父子との儒學に必しも一致しない點のあつて然るべき所以を考へた。併し班氏父子が猶進んで司馬遷の事實に對する議論が淺薄だと云ふ。これは單に黃老の術を重んじて儒家を軽く視たと云ふ點のみに關する非難ではない。普通史記の貨食並に游俠傳序の言葉に含む思想に對して下された批評であると思はるゝ。今貨殖傳序の意を譯出すれば

今の人心は總て利を求めて競奔して居る。其富を求むる手段には種々の類のあることなれど、要するに富者を拉し來りて之を貧賤の人と比較すれば、若し貧賤の人にして巖穴の中に隠れて世俗を超越する等の異行のなき限り、彼等は徒らに仁義を口にして富者をのゝしるのむしろ差つべきである。

と。彼は當時に於て明白に人心の中にある利慾心の強烈なるを認識して居るのである。この認識あり、故に彼は經濟論に於て自由放任説をとつた。(小島博士論文参照)而して其説の根據を老子に求めて、自然の勢に因るべきを述ぶるに至つたのである。然るに班固は其經濟説に於て全然立場を異にする。彼は徹頭徹尾重農論者であり、國家の經濟統制を以て良風美俗を作らしむる唯一の方法と見做したのである。故にかゝる考へ方からして司馬遷を批評すれば、其説の淺薄と見らるゝこと止むを得ない。併しそれが爲めに司馬遷の思想を以て儒家を輕視したとなせば、其間言に分寸あること勿論である。蓋し司馬遷の平準書に見れば、彼は武帝が商賈出身者を重用して國家の機關に立たしめた事實に限りなき遺憾の意を寓し、漢の高祖が社會的に商賈を困辱した方法を以て最も當を得た者と考へたやうである。故に國家としての體統を論ずるに當つては、必ず綱紀の立つべきを言ひ、其下にありて自由に萬民をして經濟生活を行はしめる。そこに何の矛盾の生ずべき乎。必ず重農政策を強制すべきことは正統な儒者の考であつたとしても、それは唯一の考へ方であるべき筈がない。又貨食傳序と共に非難の標的

たる游俠傳序の意を譯すれば、

游俠の行爲は正義には合はぬけれ共、其言ふ所は必ず行ひ、一旦引受けたことは必ず果たす。人が困つて居る時には、其身を惜まずして之を救ふ。今の如き亂世の末流を渡るには、仁義を云ふよりも寧ろ實際の利益あるを尊ぶ。鉤を竊む者は誅せられ、國を竊む者は諸侯となり、一度諸侯となれば、其門に仁義が存する。

と。蓋し當時にありては游俠者流は事實上社會に勢力を有して敢て王侯に屈せざりし意氣を有し、これに同感することによつて彼等を描寫し得るのであり、若し班固の如く游俠者流を以て一に王者の權を竊むものと定め、其罪誅滅に價すと云ふならば、その游俠を叙述するや、史記の記事を襲用したものの以外には、多くは退讓君子の風ある美德を述ふるに留むること、當然と云はねばならぬ。

一般に史記は會通の史と稱せられ、漢書は斷代の史と云はるゝ。史記は上黃帝より下自己の生存せる時代までを抱括して之を綜合叙述するに反し、漢書は劉氏前漢一代の歴史を記述したに過ぎぬ。古今を綜合する立場にあつては、異なる文明を有する各代を統記するを要し、其各代に於ける變化ある特色は決して或種の固定概念によつては捕らへ得られないであらう。此點に於ては、司馬遷の餘りに儒家の傳説を重視したことに就て却つて遺憾の意を表明せる學者さへある。若し漢書にありては自ら一代の制度を著述する者、劉家の憲法顯然として樹立して居るに當り、固より正統の在る所一定し、

之を律するに司馬遷會通の法をもつてすべきではあるまい。併し若し歴史の性質が古今に亘る大道の闡明を意圖するにありと云ふ宋の鄭樵の命題にして取るべきならば、史法の存する所、むしろ史記にありて漢書に非ずとなすべきであらう。若し史、漢の目指す所を各其立場に於て理解せんとならば、余は章學誠の意見に同意を表せんと欲する。曰く、

遷書體圓用神、多得尙書之遺、班氏體方用智、多得官禮之遺也。

と。其尙書の法と云ひ、官禮の遺と云ふは、宜しく別に論ずべきではあるが、圓神方智を以て兩者の精神を發揮する所、最玩索するに堪へ、これを以て地下の兩大史家に贈るに、恐らく必ず會心の笑を洩らすであらう。